

「学習者主体の授業」を目指した校内研修の在り方 ～児童生徒の姿を重視した授業研究を通して～

出水市立鶴荘学園（後期課程） 教諭 重信 圭祐

目 次

I	研究主題	2
II	研究主題設定の理由	2
1	研究の背景	
2	研究主題について	
III	研究の目的	3
IV	研究の仮説	3
V	研究の内容と検証方法	4
1	研究内容	
2	検証方法	
VI	研究計画	4
1	研究スケジュール	
2	研究構造図	
VII	研究の実際	5
1	仕掛け1（目指す児童生徒の姿の設定）	
2	仕掛け2（授業研究会の工夫）	
3	仕掛け3（実践を語る場の設定）	
4	その他の仕掛け	
VIII	研究のまとめ	9
1	研究の成果	
2	研究の課題	

【参考文献】

- ・ 藤井千春. “第7章 子どもの生き方の連続的発展—「子どもの学び」の観点から”. 授業研究を創る. 教育出版, 2017年, P136.
- ・ 平野朝久. はじめに子供ありき—教育実践の基本—. 東洋館出版, 2017年.
- ・ 廣瀬真琴. 『日本における school-based Instructional rounds』のモデル開発に向けた基礎的研究. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 教育科学編, 第74巻, P207-219.
- ・ OECDラーニング・コンパス（学びの羅針盤）仮訳, P3.
(https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf)（最終閲覧：令和7年1月6日）
- ・ 小野田亮介. “Chapter 6 学習への動機つけ”. 人はいかに学ぶのか—授業を変える学習科学の新たな挑戦. 北大路書房, 2024年, P139.
- ・ 白井俊. OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー, 資質・能力とカリキュラム—. ミネルヴァ書房, 2020年, P53-79.
- ・ 田上哲. “子どもの思考と人間形成に視座をおく 徹底した授業分析の視点から学ぶ”. 授業研究を創る. 教育出版, 2017年, P82-83.
- ・ 知的障害のある子どもの「深い学び」の実現に向けた授業づくり. 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校. 研究紀要第23集, 令和4年, P2.
- ・ 学びの羅針盤, 鹿児島県教育委員会, 令和6年3月, P7.
- ・ 学習者主体の学びのデザイン—学び方×ICT で多様な学びを選択する—. 鹿児島県教育センター. 令和6年3月, P1-9.
- ・ 鹿児島県教育センター, 「みんなで取組み, 学び合う授業研究」の進め方Ⅱ—授業力向上を図るワークショップ型研修を通して—, 平成26～28年度

I 研究主題

「学習者主体の授業」を目指した校内研修の在り方 ～児童生徒の姿を重視した授業研究を通して～

II 研究主題設定の理由

1 研究の背景

(1) 時代のニーズから

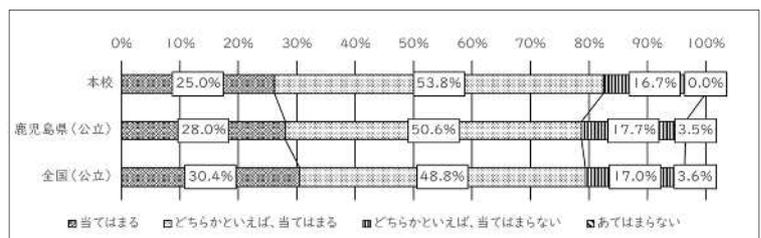
OECDが2015年から始めたFuture of Skills 2030プロジェクトでは、児童生徒が未来を生き抜き、世界を形作っていくためには、どのような知識やスキル、態度及び価値観が必要になるのかをテーマに掲げ、グローバルに議論する取組を行っている。様々なコンピテンシーを、「見通し (Anticipation)・行動 (Action)・振り返り (Reflection)」(AAR) という過程をとおして身に付けるラーニング・コンパスを示している。その中で、コンパスと表現した意味についてOECD (2019) は、「生徒が教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩み始め、意味のある、また責任意識を伴う方法で、進むべき方向を見出す必要性を強調する」としている。白井 (2020) は、ニュー・ノーマル (従来はノーマルでなかったものがノーマルになる状況) と伝統的な教育の違いの1つに、「(教師の指示の) 聞き役としての生徒」から、「能動的な参加者としての生徒」、「生徒、教師それぞれがエージェンシーを発揮」することへの変化を挙げている。エージェンシーとは「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義している。

鹿児島県教育委員会においては、令和5年に示された資料『「学習者主体の授業」の提案』で、「子供たちは本来有能な学び手である」という教師の立場に立ち、児童生徒の頭の中が「ぐるぐる働きっぱなし」の授業を目指すことが示されている。そのために、教師一人一人の子供観や授業観等について語り合い、「観のアップデート」を行うことが重要だとされている。しかし、児童生徒が主体性を発揮できる授業づくりについて、教科ごとの取組に関する先行実践はあるが、校内研修として、組織的に進めている実践は多くない。このことから、能動的な学習者としての児童生徒を育成するための研究は、今後さらに推進していく必要がある。

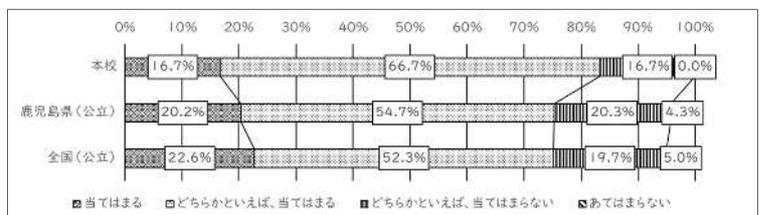
(2) 児童生徒の学びの姿から

本校の9年生 (中学3年生) を対象とした、令和5年度全国学力・学習状況調査質問紙では、「(1・2年生のときに受けた授業では) 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という問いに対して、「当てはまる」と回答した生徒の割合が、全国や県平均よりも低いことが分かった【図1】。

また、同調査で「(1・2年生のときに受けた授業では) 自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」という問いに対して、「当てはまる」と回答した生徒の割合も、全国や県平均よりも低いことが分かった【図2】。このことから、本校の最高学年である生徒は、自分にあった学び方で学習する機会を提供されておらず、自分から考え、取り組もうとすることが阻まれているのではないかと解釈した。このことから、児童生徒にあった学習する機会を提供することが、児童生徒の主体性の発揮につながるのではないかと考えた。



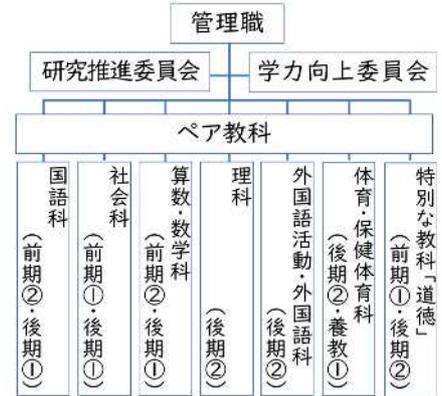
【図1】 本校9年生 (中学3年生) のアンケート結果



【図2】 本校9年生 (中学3年生) のアンケート結果

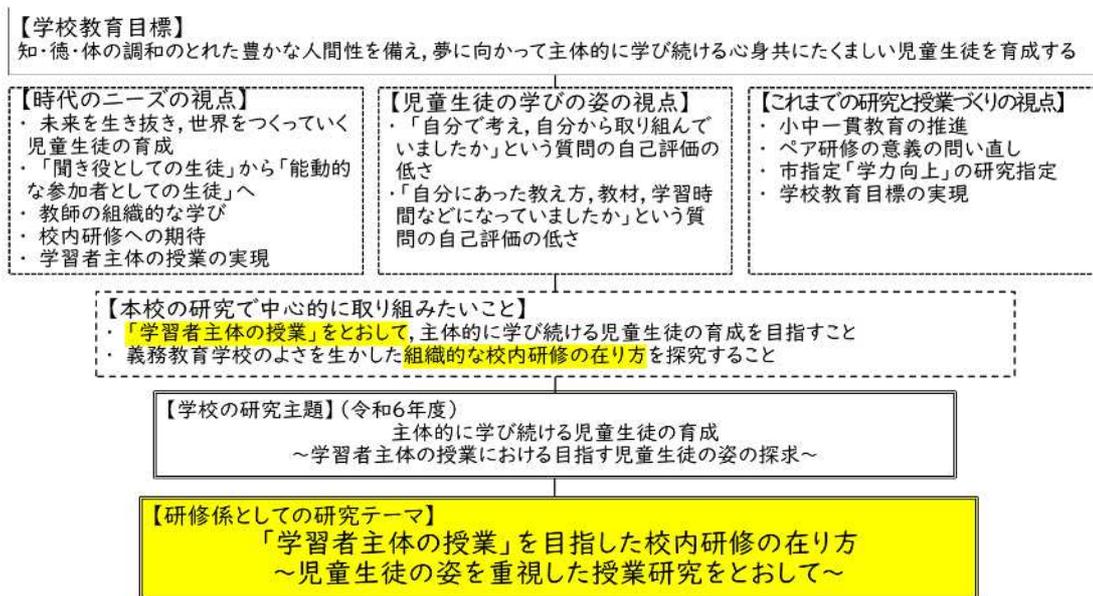
(3) 本校のこれまでの研究と授業づくりから

本校は、平成 29 年に県内初の義務教育学校として開校した。前期課程（小学校）1 年生から後期課程（中学校）9 年生までの児童生徒の学びの場があることを生かし、小中一貫教育に力を入れて取り組んでいる。学校教育目標は「知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を備え、夢に向かって主体的に学び続ける心身共にたくましい児童生徒を育成する」である。校内研修においては、前期課程教師と後期課程教師が共通教科において 2 人 1 組になって行う研修（以下、ペア研修）を行っている【図 3】。令和 6 年度から 2 年間、市の研究指定「学力向上」を受けている。授業づくりについて探究するだけでなく、義務教育学校における校内研修の意義についても問い直す機会となっている。



【図 3】研修組織図
(丸印の数字は、教師の人数を表す。)

(4) 研究主題の設定に向けて



【図 4】研究主題設定までの流れ

2 研究主題について

本研究は、「学習者主体の授業」の実現を目指すための研究である。「学習者主体の授業」とは、本校で設定した目指す児童生徒の姿に迫ることのできる授業と捉える。鹿児島県総合教育センター（2016）は、授業研究とは「授業に関する課題を組織的に解決するための、授業づくりから授業検討及び改善策等を授業実践に生かすまでの一連の過程」としており、本研究でも同様とする。また、授業研究会とは、研究授業等の事後の検討会を指すものとする。

Ⅲ 研究の目的

義務教育学校における校内研修の組織的な取組を通して、「学習者主体の授業」を実現するためには、どのように実践すればよいかを、明らかにすることである。

Ⅳ 研究の仮説

校内研修において、児童生徒の姿を重視した授業研究を組織的に行うことで、「学習者主体の授業」の実現に迫ることができるのではないかと仮説を立てる。

V 研究の内容と検証方法

1 研究内容

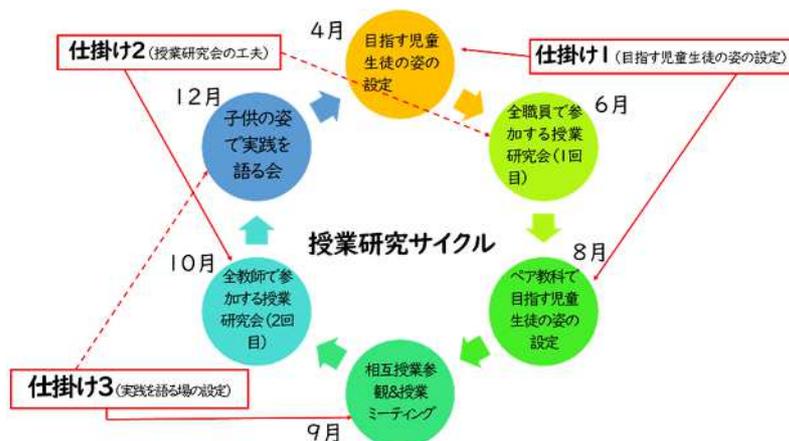
仕掛け1 目指す児童生徒の姿の設定	仕掛け2 授業研究会の工夫	仕掛け3 実践を語る場の設定
全教師で目指す児童生徒の姿を設定し、その姿を見取る授業研究を行うことで、目指す児童生徒の姿を探求し続ける。	児童生徒の姿を重視した授業研究会を実施することで、児童生徒の学びを分析し、授業改善に生かす。	児童生徒の姿で実践を語る場を提供することで、学び合う雰囲気を醸成する。
〔研究方法（具体的な取組）〕 (1) 教師の願いから目指す児童生徒の設定 (2) ペア教科で目指す児童生徒の姿と具体的な手立てを設定	〔研究方法（具体的な取組）〕 (1) 全教師が参加する研究授業&授業研究会（1回目） (2) 全教師が参加する研究授業&授業研究会（2回目）	〔研究方法（具体的な取組）〕 (1) ペア教科による相互授業参観&授業ミーティング (2) 子供の姿で実践を語る会

2 検証方法

本校教師を対象とした質問紙調査や自由記述等を年に2回実施することで、学習者主体の授業に対する捉えを分析する。また、児童生徒を対象にアンケートを実施することで、授業で学びやすさを感じることができるようになったかを検証する。

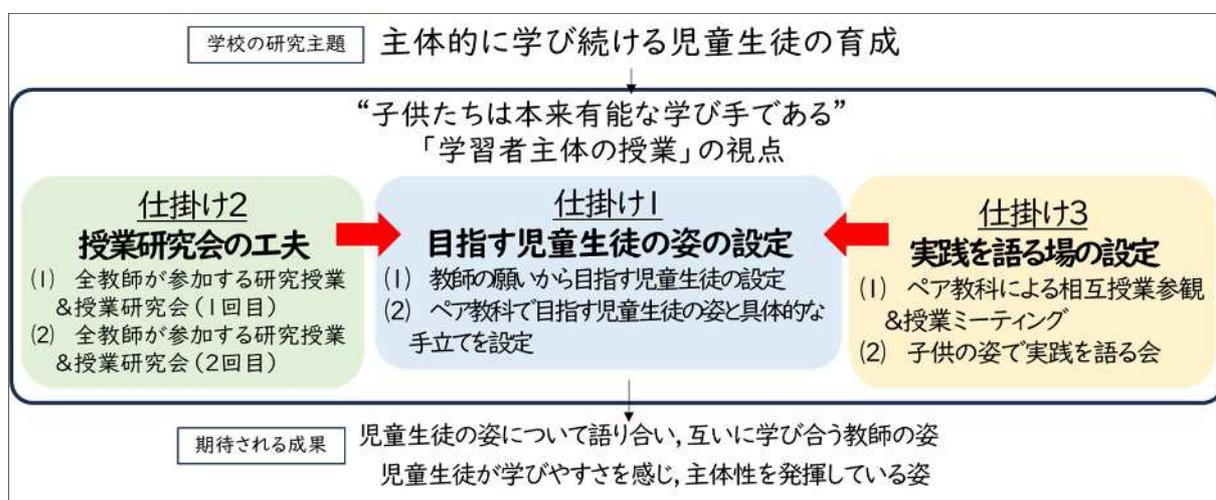
VI 研究計画

1 研究スケジュール



【図5】研究計画図

2 研究構想図



【図6】研究構想図

Ⅶ 研究の実際

1 仕掛け1（目指す児童生徒の姿の設定）

(1) 教師の願いから目指す児童生徒の設定

目指す児童生徒の姿を設定するにあたり、次の2つを実施した。

1つは、平野（2023）の『はじめに子どもありき』を全教師が読み、「なぜ学習者主体の授業を目指す必要があるのか。」「今、学習者主体の授業は実現できているのか。」について、校種、教科、経験年数（育成指標）を意図的に分けたグループで語り合った。

2つは、「学習者主体の授業」が実現しているときの具体的な児童生徒の姿を想起し、職員が相互に「納得感」のある文言として整理したことである。具体的な児童生徒の姿を想起する活動を行う際は、学級の児童生徒のことを想像し、教師の願いを込めるように留意した。教師一人一人が、具体的な児童生徒の姿を付箋紙に書き出した。その後、グループごとに書き出された付箋紙を類型化し、目指す児童生徒像を設定した。グループごとの発表では、教師Kが

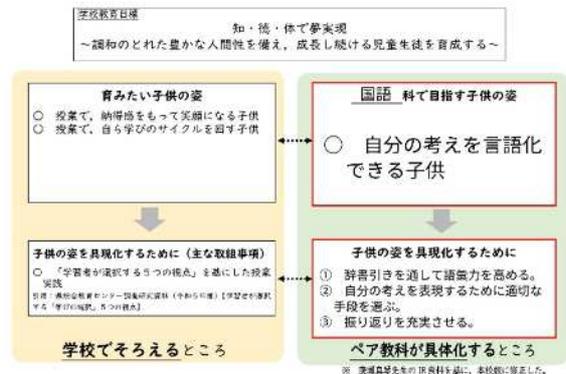


【写真1】目指す児童生徒の姿を共有

「児童生徒が授業後に納得感から笑顔になる姿を『授業のコア』と名付けた。」、教師Uが「児童生徒が学習サイクルを回す姿、学びのサイクルを回す姿を目指したい。」という発表のときに、聞き手の教師たちから「ああ」という感嘆の声があがった【写真1】。そこで、目指す児童生徒の姿として、「納得感から笑顔になる児童生徒」、「学びのサイクルを回す児童生徒」と設定し、校内研修を進めた。以上の取組を通して、目指す児童生徒の姿を設定した。

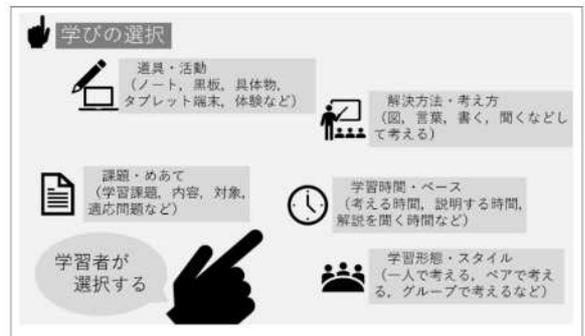
(2) ペア教科で目指す児童生徒の姿と具体的な手立てを設定

全教師で目指す児童生徒の姿を設定した後、ペア教科で目指す児童生徒の姿を設定した。学校で設定した目指す児童生徒の姿を基に、各ペア教科で目指す児童生徒の姿、そして、その姿を具現化するための手立てを設定した。前期課程の教師と後期課程の教師が教科指導において、語り合うことを通して、教科の特性に応じた目指す児童生徒の姿を設定し、共通実践することを確認した。各ペア教科で話し合った内容をまとめ、他教科と共有した【図7】。



【図7】ペア教科で目指す児童生徒の姿を設定

小野田（2024）は、「学習者は、自分が学習環境をほとんどコントロールできていないと認識している場合に比べて、自分がコントロールできていると信じている場合において、困難な課題に粘り強く挑戦する可能性が高くなる。たとえ小さなことであっても、指導中に意味のある選択をさせる機会があれば、自律性、動機づけ、そして最終的には学習や達成感を支えることができるというエビデンスがある」と学習者が選択することの意義について述べている。また、鹿児島県総合教育センター（2024）は、学習者主体の学びのデザインを目指して、「学習者が選択する『学びの選択』5つの視点」（以下、「学びの選択」）を設定し、研究を進めている【図8】。本研究では、1年生から9年生の児童生徒を対象に、「学びの選択」を取り入れた授業を行うことで、児童生徒が学びやすさを感じるこ



【図8】学習者が選択する「学びの選択」5つの視点（鹿児島県総合教育センター調査研究会資料より抜粋）

とができるようにした。さらに、ペア教科でその手立てを考えることで、教師の働き掛けを具体化させた。

2 仕掛け2（授業研究会の工夫）

(1) 全教師が参加する研究授業&授業研究会（1回目）

藤井（2017）は、授業研究の目的について、「知識・技能を効果的かつ確実に習得させる指導法に矮小化してはいけない。『子どもの学び』へと発展するように学習活動を構想し、実践し、検討すること」と述べている。廣瀬（2023）は、児童生徒の学びに着目した授業研究会の手法（以下、プロトタイプ）を提案しており、「プロトタイプは、校内において、専門教科の異なる集団における授業研究会で導入できる手続きを内包している」と述べている【図9】。校種や専門教科の異なる教師が一緒になって研修を進める本校において親和性が高いと考え、活用することとした。また、同プロトタイプは、本県教育委員会（2024）の「学びの羅針盤」にも掲載されており、本校で採用する後押しとなった。

本校では、令和6年6月に第1学年算数科の授業を全職員で参観し、授業研究会を行った。授業に参加するときは、観察対象となる児童を決めて、児童生徒・教師・学習内容の3つの視点で記録をとった【写真2】。授業研究会では、校種、教科、経験年数を混ぜたグループで、協議ができるように配慮した。授業研究会後の教師の振り返りの記述の一部は、次のとおりである。

観察前	・ 観察する子供を一人決めて追跡する(観察側もチームを組む)。
記述	・ 子供の姿を観察し、事実に基づき記述する。
分析	・ 目指す子供の姿に迫れている子供の事実と、迫れていないと解釈した付箋などに大別する。
推測	・ 目指す子供の姿が表出した背景について、教師の関わり合い等の観察記録を基に解釈する。 ・ 感情面まで含めて子供になりきり、かれらの視点から展望を構想するなかで、互いの授業経験やアイデアなどを共有する。

【図9】廣瀬（2023）プロトタイプ（一部抜粋）



【写真2】役割を分担し記録をとる教師

- ・ 事実を挙げていくことで、児童生徒に対する手立てや、児童生徒の姿、想いなども考えられることが分かった。
- ・ 一人の目線に焦点を当てることで、授業の表面だけでなく、学習者の内面に思いをはせることができた。
- ・ 一人に絞って観察することで、普段見逃している児童生徒の反応に気付くことができた。
- ・ 職員の理解度が違うので、今後研修を積み重ねていくことが大切だと思った。
- ・ 役割が1つに決められていることで、全体の児童生徒、学級の様子が見取れなかった。
- ・ 授業中に（児童生徒に）話し掛けると、見取れなくなるのではないかと。

これらの教師の振り返りを受け、戸惑いの感想や授業研究会を進める上での意見については、研究推進上の貴重な素材として取り扱い、全教師で学びを深める機会とすることとした。次の内容を変更したり、周知したりした。

- ・ 児童生徒の主体性の発揮を観察しようとする中で、参観者の安易な支援がそれを阻害する可能性があること。
- ・ 本研究の目的に照らして、一人の児童生徒に着目することを継続すること。
- ・ 一人の教師が児童生徒・教師・学習内容のすべてを記録できるように変更すること。

(2) 全教師が参加する研究授業&授業研究会（2回目）

ペア教科による相互授業参観&授業ミーティングの実施期間の最終日に、全職員が参加する研究授業&授業研究会を実施した。2回目となる今回は、第7学年国語科の授業である。授業研究会後の教師の振り返りの記述の一部は、次のとおりである。（※下線は研修係が付けたもの）

- ・ 本校の国語科が「ペア研」等で決めた国語科における目指す児童生徒像を確認してから授業参観に臨めばよかった。そうすれば、一層目の前の生徒と理想を比較しながら参観できたと反省した。学びの形態の選択・決定の場をつくることの意義を改めて感じた。もっと言えば、普段から指示がなくても自然と互いに意見を聞きあえるような場や関係、習慣をつくっていききたいものだと思った。また、協働的に学びたい生徒もいる反面、一人でやりたいと思っている子は、「これは一人でやりたいから」と言っても互いに認め合える関係なども大切にしたい。
- ・ 児童生徒の学び方を選択する機会を設けることが大切であることは理解しているつもりであったが、児童生徒によっては一人でやりたいが、友達とやっているというような状態で見られることに気付くことができた。自分自身で「この子に聞けば分かるかも。」や「今は自分だけで解決できそう。」などの前向きな学びの選択をする力を付けることが大切だと分かった。また、教師が一人で取り組む時間を提示することも効果的だと学んだ。

これらの振り返りから、目指す児童生徒の姿を描くことが教師の中で少しずつ意識化されていると解釈することができた。また、目指す児童生徒の姿が、教師の中で少しずつ変化していることが分かった。

3 仕掛け3（実践を語る場の設定）

(1) ペア教科による相互授業参観&授業ミーティング

令和6年9月9日～10月21日の期間に、ペア教科による相互授業参観・授業ミーティングの期間を設定した。本校は、毎週水曜日を相互授業参観デーと名付けて、互いに授業を見合う活動を行っている。しかし、日常的に授業を相互参観する教師は多くない。そこで、重点的に取り組む期間を設定することで、ペア教科で互いの授業を参観し合い、授業について語る機会をつくった。授業ミーティングとは、鹿児島大学教育学部附属特別支援学校の実践であり、「一緒に授業をする教師同士の授業研究」の手法を取り入れた協議のことである。



【写真3】 授業ミーティングの様子（国語科）

ペア教科で、目指す児童生徒の姿や、その具体的な手立てについて考えてきたことから、親和性が強いと考え、この手法を採用した。授業ミーティングでは、児童生徒を主語にして語る事が重要とされており、児童生徒の姿を基に、その理由を考え、改善案を考える手順となっている。また、20分という短時間で実施できる【写真3】。実施期間中、「観察対象（抽出児）を誰にすればよいのか悩んでいる。」という教師の声があがった。そこで、先行研究を調べた。田上（2017）は、抽出児を決めて授業を観察することについて、「対象となる子は単に手がかかりなのである。その子を見ることによって、他の子もよく見ようというのである。ひとりの子を見るにも、他の子を忘れて見ることはない。他の子との比較において見るのである」と述べており、児童生徒の言動やその背後にある思考を深く読み取るために、抽出児を設定するとしている。観察対象（抽出児）となる児童生徒を1人に決めることの意義を全教師で共有し、実践を進めた。学習指導案の提出は求めず、観察対象（抽出児）とする児童生徒名、目指す児童生徒の姿を記入する用紙を準備し、一人1回は授業を実施するようにした【図10】。

観察対象となる児童生徒名() 授業ミーティング記録シート

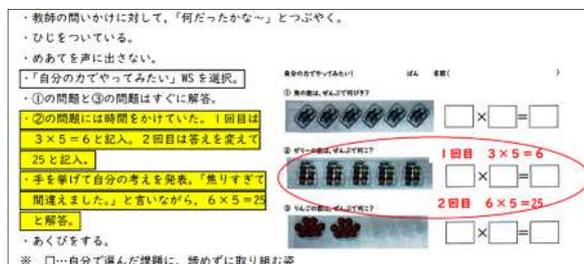
教科	単元・題材名	時数	授業期日
数学	平面図形 90°の作図	(3/14時間目)	令和 6年 9月12日
本時で目指す子供の姿			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒が学習形態を選択して、垂直二等分線を基にした作図をしようとする。 ・ 3点から等しい距離にある点を、垂直二等分線を二回作図することで求めることができる。 			

【図10】 授業ミーティングの記録用紙（一部抜粋）

(2) 子供の姿で実践を語る会

教師同士で、授業について対話する機会を増やすことで、今後の実践に生かし、全教師で授業力の向上を目指すことを目的として、「子供の姿で実践を語る会」を計画した。その事前準備として、A4用紙1枚程度の実践の記録を作成した【図11】。形式は自由で、教師の創意工夫が発揮しやすいように配慮した。実践の記録の作成については、データを共有ドライブにアップロードすることで、他の教師が作成するときに見られるようにした。

「子供の姿で実践を語る会」では、校種、教科、経験年数等を混ぜた4人程度のグループを形成した。各グループでは、事前にファシリテーター役を設定したが、役割は時間を管理すること程度にとどめるようにした。参加するときの留意点として、「失敗」、「試行錯誤」、「ありのまま」を掲げ、教師同士がじっくり語り合う時間を設定した。以下は、教師の振り返りの



【図11】実践の記録（一部抜粋）

記述である。ペア教科以外の実践から多くの参考になる指導方法を学んだり、児童生徒を見取ることの大切さを気付いたりした記述が見られた。また、同僚教師の悩みや「困り感」を聞いたことで、学び合う支援体制を築くきっかけにすることができた。（※下線は研修係が付けたもの）

- 先生方の実践記録を読ませていただいて、教科を越えて実践できそうな指導方法が見つかったり、同じような「困り感」を抱えていることに気付いたりすることができた。また、学習形態の自己選択・自己決定の場面における「困り感」が話をすることで解決することができた。（前期課程教師）
- 「子供の姿で実践を語る会」をとおして、改めて教材研究の大切さに気付いた。経験豊富な先生方も日々寝る間を惜しんでたくさんの教材研究をされていた。自分自身の授業力向上に向けて、自己研鑽を惜しまない教師でありたい。（前期課程教師）
- 「子供の姿で実践を語る会」では、異なる教科や発達段階であったとしても、目指す児童生徒の姿や授業のゴールなどにおいて、共通する部分も多くあると感じた。児童生徒が学ぶ意欲をもつことができるようにするための工夫、学んだことを自分自身の表現に生かすことができるような工夫など、他の教科の実践の中から自身の授業づくりに生かせそうな内容が多くあった。今後もたくさんの先生方と意見を交流し合いながら、研究と修養に励みたい。（後期課程教師）
- 学習者主体の授業をするためには、児童生徒の姿をしっかりと見取った上で、授業の事前準備をする必要があると強く感じた。やってみて、気付いて、改善しての繰り返しだろうと思う。（後期課程教師）

4 その他の仕掛け

(1) 経験者年次研修における授業研究会の支援

校内研修には計画されていないが、フレッシュ研修等で授業研究会に参加する機会があった。そこで、研修係として、授業者の支援をするために授業研究会の運営を担うことになった。本校は、これまでフレッシュ研修等の授業研究会を行うときは、「成果」、「課題」、「改善策」を3色の付箋に書き分けて、ワークショップ型の授業研究を行ってきた【図12】。今年度は、研究の内容と関連させ、「児童生徒の事実」、「教師の事実」、「学習内容の事実」を3色の付箋に書き分けて、協議を行うことにした【図13】。授業研究会に参加した本校教

成果 (・▽・)イネ!!	課題	改善策 (こうしたらいいかも…)

【図12】 これまでの授業研究会における付箋の分類

児童生徒の事実	教師の事実	学習内容の事実
(例) ○○さんが、ノートに□ □と書いていた。	(例) ○○さんに、「□□」 と声をかけていた。	(例) 練習問題は、○○。

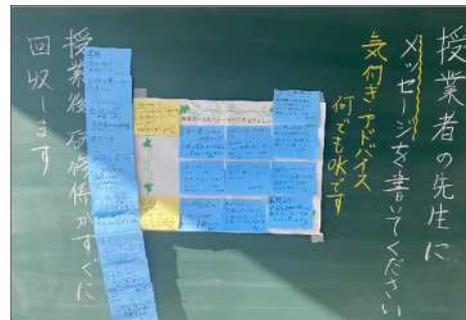
【図13】 校内研修との関連を図った付箋の分類

師から以下のような意見をもらうことができた（○：成果，△：疑問）。

- 授業を児童生徒の姿で教えてもらえるので，授業研究会の意見に納得感をもつことができる。
- △ 初任者研修の授業研究で，3つの付箋（「児童生徒の事実」，「教師の事実」，「学習内容の事実」）をどのように扱えばよいのか分からなかった。

これらの意見から，初任者研修等の授業研究では，教師の指導技術を磨くという目的があることを解釈することができた。研修係として，どちらの手法にもよさがあると捉え，授業者が何を覚えてもらいたいのか等を事前に聞き取り，授業研究会の手法を選べるように配慮した。さらに，授業は参観することができても，授業研究会には参加できない教師のために，メッセージを書くためのボードを準備した。多くの教師から前向きなメッセージが寄せられた

【写真4】。



【写真4】 研究授業後のメッセージ

(2) 鶴荘スタ掲示板の活性化

これまで，本校の授業づくりのポイントを1枚にまとめた「鶴荘スタンダード」を作成し，授業づくりの指針としてきた。本研究を進めるにあたり，学習過程に「学びの選択」を取り入れるように変更を加えた。鶴荘スタンダードに基づく実践を共有する掲示板（以下，鶴スタ掲示板）を設置し，教師同士で実践を語るできるようにした。その際，「学びの選択」の5つの視点ごとに分けて掲示することで，実践を把握しやすいように工夫した。鶴スタ掲示板が効果的に活用されるように，ペア教科の授業を参観した教師が，授業者の実践から学びになったことを掲示するようにした【写真5】。その際，教師の指導法だけの説明にならないように，児童生徒の姿を加えて説明するように留意した。



【写真5】 鶴スタ掲示板に実践を貼る教師

教師の指導法だけの説明にならないように，児童生徒の姿を加えて説明するように留意した。

Ⅷ 研究のまとめ

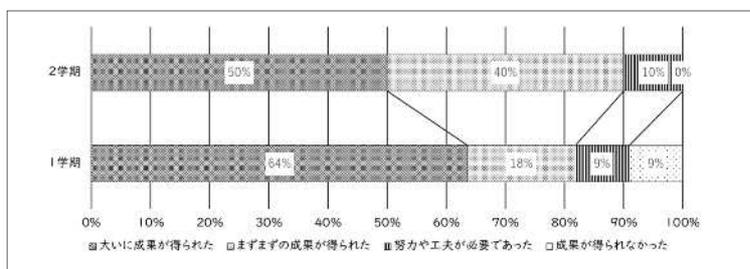
本研究では，校内研修において，児童生徒の姿を重視した授業研究を組織的に行うことで，「学習者主体の授業」の実現に迫ることを目的とした。本校教師を対象としたアンケートや，授業研究会の記録を考察し，本研究の成果と課題を整理する。

1 研究の成果

(1) 目指す児童生徒の姿を掲げ，児童生徒の学びについて考えたこと

授業研究会後に教師を対象に実施したアンケートが次のとおりである。「あなたは，教師の考えよりも児童生徒の学びに焦点を当てることができましたか。」という質問に対して，第1回より第2回の方が多くの教師が「当てはまる」と回答していることが分かる【図14】。このことから，従来の教師の教え方だけでなく，学習の主体である児童生徒に焦点を当てることができているといえる。

一方，第2回授業研究会では，「あまりあてはまらない」と回答した教師が7%いることが分かった。該当教師の自由記述を見ると以下のように書かれていた。

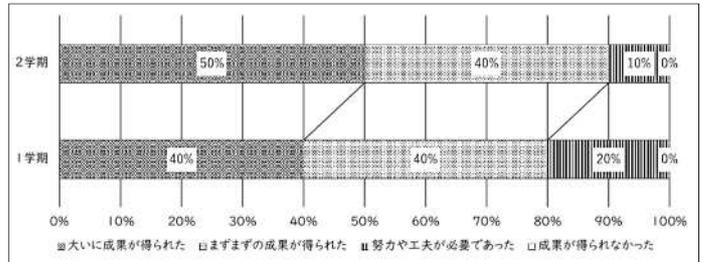


【図14】 授業研究会後のアンケートの比較

児童生徒の学び方を選択する機会を設けることが大切であることは理解しているつもりであったが、児童生徒によっては一人でやりたいが、友達とやっているというような状態も見られることに気付くことができた。自分自身で「この子に聞けば分かるかも」や「今は自分だけで解決できそう」などの前向きな学びの選択をする力を付けることが大切など分かった。また、教師が一人で取り組む時間を提示することも効果的だと学んだ。

この自由記述から、生徒に学び方を選択する手立てを講じた教師に着目していることが分かる。生徒の学びに着目しながら、さらに、その裏側にある教師の役割について言及していることから、自己評価が低くなっていると解釈した。本校では、校内研修の授業研究会をとおして、生徒の姿を見取り、生徒の姿について語り、さらには、教師の指導方法について考えることができていると解釈することができ、研究の成果としてあげられる。成果は、学校評価（教師対象）にも現れている

【図 15】。「個別最適な学びと協働的な学びによる『学習者主体の授業』の実践」の質問に対して、ポジティブな回答をする割合が増えていることが分かる。



【図 15】学校評価（教師対象）の比較

(2) 児童生徒にとって学びやすい授業を目指した授業改善ができてきていること

児童生徒が授業に対して、どの程度学びやすさを感じているかを把握するために質問紙調査を実施した。質問紙調査は、鹿児島県総合教育センターの質問項目を一部変更して利用した。後期課程 7～9 年生の結果を第 1 回調査（9 月）と第 2 回（12 月）を比較したものである【図 16】。数値は、評価対象とした 7 つの教科を合わせたものである。「学びの選択」の 5 つの視点において、「学習時間・ペース」以外の項目において、「あてはまる」と回答した生徒の割合が増えていることが分かる。「学習時間・ペース」の項目においても、「どちらかといえば、あてはまらない」と回答した生徒の割合が減少し、「どちらかといえば、あてはまる」と回答した生徒の割合が増加していることが分かる。このことから、自分の学び方にあっているというポジティブな回答が全体的に見て増加していることは、成果としてあげられる。

	あてはまる			どちらかといえば、あてはまる			どちらかといえば、あてはまらない			あてはまらない		
	前回(9月)	12月	差	前回(9月)	12月	差	前回(9月)	12月	差	前回(9月)	12月	差
解決方法・考え方	53%	53%	0%	39%	39%	0%	7%	7%	0%	1%	1%	0%
道具・活動	57%	59%	2%	36%	35%	-1%	6%	5%	-1%	1%	1%	0%
課題・めあて	54%	55%	1%	36%	35%	-1%	10%	10%	0%	0%	0%	0%
学習時間・ペース	58%	57%	-1%	31%	34%	3%	10%	8%	-2%	1%	0%	0%
学習形態・スタイル	63%	66%	3%	31%	28%	-3%	5%	5%	0%	1%	0%	0%

【図 16】アンケートの比較（後期課程のみ）

2 研究の課題

(1) 目指す児童生徒の姿の正当性、妥当性を常に問い直し続ける必要があること

本校では、学習指導要領や学校の実態を踏まえた教師の願いから、目指す児童生徒像を通して「学びのサイクルを回す児童生徒」、「納得感から笑顔になる児童生徒（授業のコア）」を設定して実践を進めてきた。2 回の授業研究会や授業ミーティングで、教師が抱く「学習者主体の授業」のイメージや、目指す児童生徒の姿が変わってくる（より深まってくる）ことが分かった。児童生徒は日々成長し続ける中で、目指す児童生徒の姿は現状のままでよいのかと、問い直し続けることが大切になってくる。全員が参加する授業研究会の後半に、目指す児童生徒の姿について再考する時間を取ることなどが考えられる。

(2) 目指す児童生徒の姿と資質・能力の関係を整理すること

目指す児童生徒の姿は、学習指導要領が定める三つの資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）が合わさり、発揮されている姿として捉え、研究を進めてきた。しかし、その目指す児童生徒の姿を発揮するには、どのような資質・能力を育成する必要があるのかを明記することができなかつた。学校全体で目指す児童生徒の姿と、育成したい資質・能力を掲げて指導に当たらなければならない。このとき、学校が定める教育目標や、校訓、目指す児童生徒像との関連も整理する必要がある。